

新資料 紀州東照宮の服飾類 下

—紀州東照宮服飾類調査報告 一—

神 谷 榮 子

E

E-1 和歌祭舞楽装束

赤地紋紗袍 左方(図版VII a、挿図34) 赤地輪無唐草紋紗(文丈一九〇・二センチ、

窠間幅一三・二センチ、地は三本の片緞れの紗で、文様部分は平組織である。密度は一センチ間に、経糸は五四本前後、緯糸は二〇越前後、後染。)の襦のある袍(縫腋の袍)である。赤地であるから左方の装束で、丈は背縫位置で襦の下端まで一四七センチ、衿は一〇一センチ、後身幅は三四センチ、袖丈は六七センチ、重量は三〇〇グラムである。

E-2 和歌祭舞楽装束

赤地紋紗袍 左方 E-1と同製で、袍の形も同じ縫腋の袍である。丈は背縫位置で襦の下端まで一五二センチ、衿は一〇〇・五センチ、後身幅は三四センチ、袖丈は六六センチ、重量は二八〇グラムである。

E-3 和歌祭舞楽装束

赤地袍 左方(図版VII b、挿図35) 赤地紗窠文繡(窠文は長径が八・八・二センチ、短径が七・五・八センチで、繡法は大部分が渡し繡、地は二本の片緞れの無紋の紗で、密度は

紀州東照宮の服飾類 下

一センチ間に、経糸は三六本前後、緯糸は二五越前後、裂幅四六センチ、後染。)の襦のない袍(闕腋の袍)である。赤地であるから左方の装束で、丈は背縫位置で裾の下端まで二七一センチ、前丈は肩山から一一六センチ、衿は一〇八センチ、後身幅は四三・五センチ、袖丈は五九センチ、重量は六四五グラムである。

E-4 和歌祭舞楽装束

赤地袍 左方 赤地紗窠文繡(窠文の大きさと繡法、地裂はE-3と同じ。)の闕腋の袍で、左方の装束、丈は背縫位置で裾の下端まで二六四センチ。前丈は肩山から一一二センチ、衿は一〇七・五センチ、後身幅は四三センチ、袖丈は五六センチ、重量は六六五グラムである。

E-5 和歌祭舞楽装束

赤地袍 左方 赤地紗窠文繡(窠文の大きさと繡法、地裂はE-3と同じ。)の闕腋の袍で、左方の装束、丈は背縫位置で二六二センチ、前丈は肩山から一一二センチ、衿は一〇六センチ、後身幅は四三センチ、袖丈は五六・五センチ、重量は六二五グラムである。

E-6 和歌祭舞楽装束

赤地袍 左方 赤地紗窠文繡(窠文の大きさと繡法、地裂はE-3と同じ。)の闕腋の袍

で、左方の装束、丈は背縫位置で裾の下端まで二七〇センチ、前丈は肩山から一八センチ、衿は一〇七・五センチ、後身幅は四三センチ、袖丈は五八・五センチ、重量は六二〇グラムである。

E-7 和歌祭舞楽装束

赤地袍 左方 赤地紗窠文繡（窠文の大きさと繡法、地裂はE-3と同じ。）の闕腋の袍で、左方の装束、丈は背縫位置で裾の下端まで二七一センチ、前丈は肩山から一七・五センチ、衿は一〇八センチ、後身幅は四三センチ、袖丈は五七・五センチ、重量は六三五グラムである。

E-8 和歌祭舞楽装束

青地袍 右方 青地紗窠文繡（窠文の大きさと繡法、地裂はE-3と同じ、後染の青色。）



挿図34 赤地紋紗袍 左方 (E-1) a 正面 b 背面



挿図35 赤地袍 左方 (E-3) a 正面 b 背面

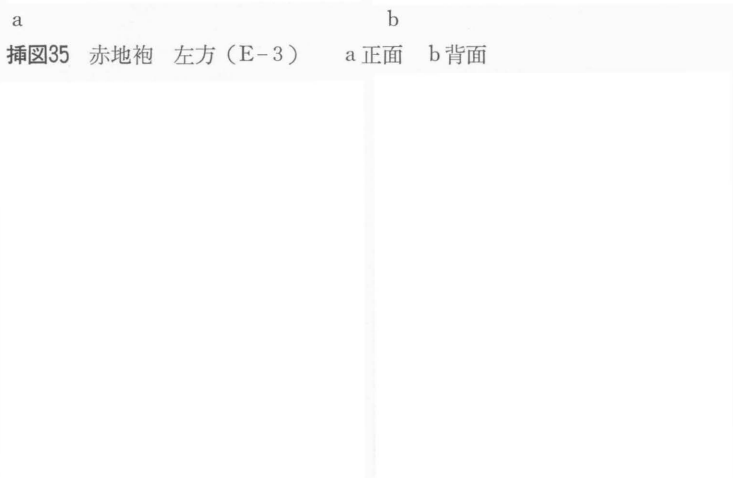
の闕腋の袍で、青地であるから右方の装束。丈は背縫位置で裾の下端まで二五八・五センチ、前丈は肩山から一一〇センチ、衿は一〇七センチ、後身幅は四三センチ、袖丈は五三・五センチ、重量は六〇〇グラムである。

E-9 和歌祭舞楽装束

青地袍 右方 青地紗窠文繡（窠文の大きさと繡法、地裂はE-8と同じ。）の闕腋の袍で、右方の装束、丈は背縫位置で裾の下端まで二六一センチ、前丈は肩山から一一二センチ、衿は一〇七・五センチ、後身幅は四三センチ、袖丈は五五・五センチ、重量は五九五グラムである。

E-10 和歌祭舞楽装束

半臂 左方（図版Ⅷa、挿図36） 装束総体に赤色の多い左方の半臂で、三重襷に桐



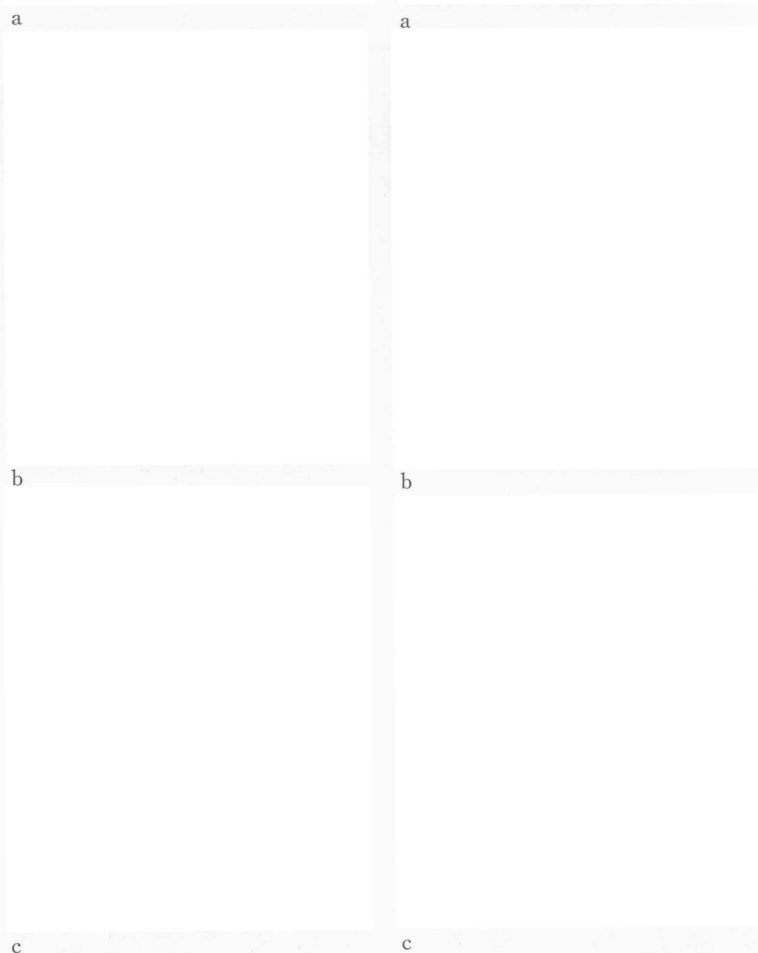
挿図36 半臂 左方 (E-10) a 正面 b 背面

竹鳳凰が刺繡であらわされている。繡法は大部分が渡し繡。地裂は紺地平絹（地合は、経糸は細く、緯糸は太く、経糸緯糸共につまっており、密度は一センチ間に、経糸は四八本前後、緯糸は三二越前後、後染。）、裏裂は紺地麻（密度は一センチ間に、経糸は二〇本前後、緯糸は一八越前後、後染。）、縁裂は赤地の桐竹唐草文唐織（文丈は一六センチ前後で窠間幅は不詳、地は平組織で経糸は二本引揃え、密度は一センチ間に、経糸は四四本前後、緯糸は二四越前後、薄手の唐織である。この縁裂の唐織は右方用には同文の青地が用いられており、E-14、17の下襲の縁裂にも同裂の唐織が左方用、右方用それぞれ赤地青地

挿図39 鳥甲, 石帯, 靴, 糸鞋 (E-18~23)

のものが使われている。この縁裂の唐織は桃山時代頃から舞楽装束の半臂や下襲の縁裂用に作られていたのか、四天王寺の舞楽装束の半臂や下襲の縁裂も同様な柄で同じ手の唐織のようである。^{註34} 丈は背縫位置で欄の下端まで七七・五センチ、後身幅は袖口裂(四・一センチ幅)別で三三センチ、襟幅は四センチ、重量は三〇〇グラムである。

E-11 和歌祭舞楽装束
半臂 右方 装束総体に青色の多い右方の半



挿図37 下襲 左方 (E-14)
a 正面, b 背面, c 下前部分

挿図38 下襲 右方 (E-16)
a 正面, b 背面, c 裾部分

臂で、三重襷に桐竹鳳凰が刺繍であらわされている。繡法はE-10同様大部分が渡し繡。地裂はE-10と同じ紺地平絹、裏裂もE-10の裏裂と同じ紺地麻。縁裂は青地の桐竹唐草文唐織(文丈、窠間幅、地合はE-10の縁裂と同じ)。丈は背縫位置で欄の下端まで七七センチ、後身幅は袖口裂(四・一センチ幅)別で三三・五センチ、襟幅は四センチ、重量は三〇〇グラムである。

E-12 和歌祭舞楽装束

半臂 右方 E-11と殆ど同様な半臂で、丈は背縫位置で欄の下端まで七四センチ、後身幅は袖口裂(四・一センチ幅)別で三四センチ、襟幅

は四センチ、重量は三一〇グラムである。

E-13 和歌祭舞楽装束

半臂 右方 E-11、12と殆ど同じ半臂で、丈は背縫位置で欄の下端まで七七センチ、後身幅は袖口裂(四・二センチ幅)別で三四センチ、襟幅は四センチ、重量は二九五グラムである。

E-14 和歌祭舞楽装束
下襲 左方 (挿図37)

舞楽装束の中でも下襲は、動作に伴う摩擦が最も多く生じる装束であるため、袍や半臂に比べ傷みが著しい。ここに挙げるE-14からE-17の四領の下襲も、裾、袖、上前などは使用度が頻繁であったことを想わせる傷み具合で、それらの

損傷部分には、度重なる補修のあとや補填裂が見られる。

E-14はそれら四領の下襲の中では比較的損傷部が少くきれいだといえる。縁裂に、E

10の左方の半臂に用いられている縁裂と同じ赤地の桐竹唐草文唐織が用いられている。

縁裂の内側にとど付けたある飾り紐は、茶・白・鶯色の段で、赤と黒の糸が山道形に全体を飾っている組紐である。地裂は白地桐竹唐

草文綸子(文丈は一〇・五センチから一一センチ、窠間幅は八・五センチ、密度は一センチ間に、

経糸は九五本前後、緯糸は三〇越前後)で、袖、

前の腰、後の腰と裾には、友禪(糸目糊の防染で表出された細い輪郭線、赤、黄、黄土色、藍

の濃淡二種、黒の計六色の挿し)と刺繡(菱部分の唐草、松喰鳥の松の折枝と鳥の脚)で桐竹唐草の菱に松喰鳥の模様が配されている。襟と袖口には赤地繁菱文縹子(文丈三センチ、窠間幅六・三センチ、文は経の五枚縹子、地は緯の五枚縹子で、密度は一センチ間に、経糸は一〇〇本前後、緯糸は三六越前後、後染)、裏は胴裏は白麻(苧麻で、密度は一センチ間に、経糸は二〇本前後、緯糸は一八越前後)、袖裏と裾裏は紫平絹(羽二重の

ような平絹で、密度は一センチ間に、経糸は五〇本前後、緯糸は三五越前後、後染)、丈は背縫位置で裾の下端まで一八七センチ、前丈は上前(左身頃)の肩山から下端まで一〇六センチ、衿は九九センチ、後身幅は三七センチ、袖丈は五九センチ、重量は六二〇グラムである。

E-15 和歌祭舞楽装束
下襲 右方 E-14と法量が多少異なる以外は殆ど同じ左方の下襲である。袖、後身

頃の裾、上前の下半は舞楽上演時の摩擦による損傷が著しく、同種の裂の当て裂(恐らく当初は、この平舞装束も相当の具数があったであろう。損傷の著しいものから引き解かれて、同種の装束の補修裂として裏からの当て裂に使用されている様相が、これら下襲の著しい損傷部の補修法から窺われる。)が目立つ。しかし、下前は上前の下層にあつて石帯との直接の摩擦がないためか、上前の傷み具合とは雲泥の差で、四領の下襲の中でも損傷の著しいこの下襲でさえ下前は恰も当初の姿を伝えているように

きれいである。縁裂、飾り紐、地裂、友禪と刺繡の加飾、襟と袖口裂、胴裏、袖裏と裾裏の裂はE-14と同じである。丈は背縫位置で裾の下端まで一八六センチ、前丈は上前(左身頃)の肩山から下端まで一〇六センチ、衿は九九・五センチ、後身幅は三六センチ、袖丈は五八センチ、重量は六八〇グラムである。

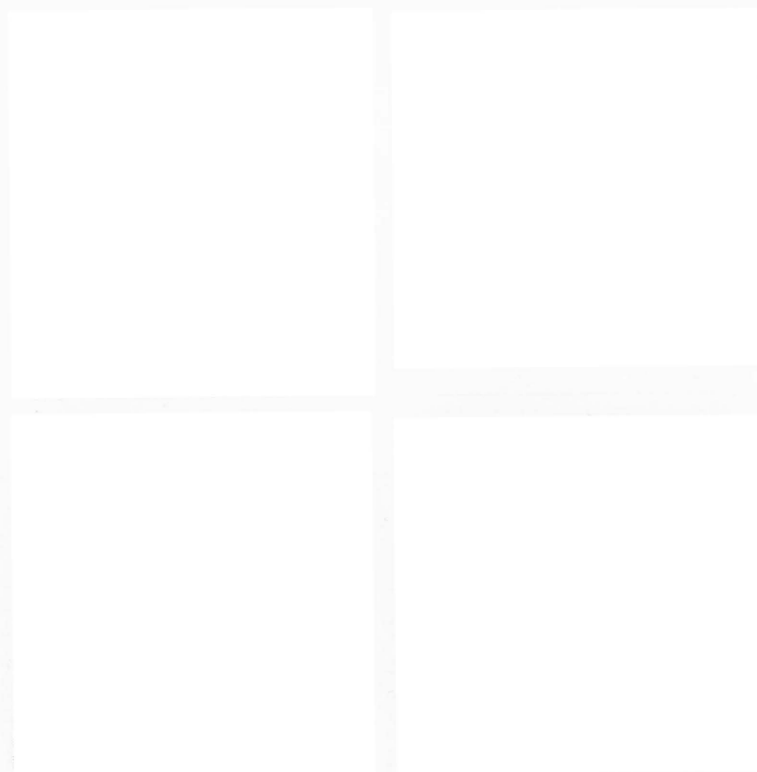
E-16 和歌祭舞楽装束
下襲 右方(図版Ⅷb、挿図38) 下襲四領中このE-16は最も損傷が少くきれいだ

ある。次のE-17と共に全体に青い色調の多い右方の装束である。縁裂に、E-11、12、13の右方の半臂の縁裂と同じ青地の桐竹唐草文唐織が用いられている。飾り紐は前出E-14、15の左方の下襲と同じ段に山道文様の組紐で、地裂も同様

挿図40 東照社縁起 第五巻 部分 和歌祭舞楽図 住吉広通筆 和歌山 紀州東照宮蔵

挿図41 茶壺口覆 向って左より楊柳、小面、佐藤

- 白地桐竹唐草文綸子である。
袖、前の腰、後の腰と裾には、
E-14、15と同様の友禅と刺繍で桐竹唐草の菱に松喰鳥の模様が配されている。ただ友禅の配色が左方は桐竹唐草菱の外郭部分が薄藍であり、右方は黄になっているなどの相違がある。襟と袖口の赤地繁菱文綸子、胴裏の白麻は、地裂の白綸子同様左方右方の別なく四領共裂である。袖裏と裾裏はこのE-16と17の右方用二領には水浅葱平絹(羽二重のような平絹で、密度は一センチ間に、経糸は五〇本前後、緯糸は三〇越前後、後染。)が用いられている。丈は背縫位置で裾の下端まで一八九センチ、前丈は上前(左身頃)の肩山から下端まで一〇一センチ、衿は一〇〇センチ、後身幅は三七・五センチ、袖丈は五八センチ、重量は六三〇グラムである。
- E-17 和歌祭舞楽装束
下襲 右方 E-16と同じ手の右方の下襲であるが、裾などに著しい損傷がある。丈は背縫位置で一八六センチ、前丈は上前(左身頃)の肩山から下端まで一〇二センチ、衿は九八センチ、後身幅は三六センチ、袖丈は五五センチ、重量は五九〇グラムである。
- E-18 和歌祭舞楽装束
石帯 左方(挿図39中央の列の向って左) 左方用の全体に赤色の多い石帯で、幅四・四センチ、長さ五二・五センチ、丸柄六個が中に巡方は二個ずつ両側に、上手は四・五センチ幅の長さ六八センチ、重量は二四五グラムである。
- E-19 和歌祭舞楽装束
石帯 右方(挿図39中央の列の向って右) 右方用の全体に青色の多い石帯で、幅四・四センチ、長さ五二・五センチ、丸柄六個が中に巡方は二個ずつ両側に、上手は四・六センチ幅の長さ六八センチ、重量は二五〇グラムである。
- E-20 和歌祭舞楽装束
鳥甲 左方(挿図39、上の列の向って左) 左方用の全体に赤色部分の多い鳥甲で、頭囲り位置の片面幅は三二センチ、頭部高さ二七・五センチ、垂部の幅は三二センチで高さは一六センチ、重量は四二〇グラム。表に用いられている裂地は文丈が七センチから七・三センチ、窠間幅は七センチの雲文銀欄で、地色は赤と青(緑)と紫の三種(同文異色の銀欄、搦み糸は別搦みで何れも白絹糸)が用いてある。葵文は外径八・八センチ、内径六・八センチである。
- E-21 和歌祭舞楽装束
鳥甲 右方(挿図39、上の列の向って右) 右方用の全体に青色部分が多い鳥甲で、形、大きさ、葵文、重量はE-20と同じである。
- E-22 和歌祭舞楽装束
靴 (挿図39下の列の向って左) 黒革の深靴で、口の部分には一〇・七センチ幅で白地紗綾形地に牡丹唐草文銀欄が用いてある(この牡丹唐草文は笹蔓手風の文様。搦み糸は別搦みで赤絹糸)。足の長さは二六センチ、深さ二五センチ、甲の幅一〇センチ



挿図42 a 茶壺口覆を伸ばしたところ。何れも裂のタテ方向は \swarrow 。上段向
って左から華山、楊柳、下段向って左から小面、佐藤
b aの写真4枚から文様の復元が出来てその復元図。
製図は染色家の斎藤孝子氏。

チ、甲の幅測定的位置での甲囲りの外周は二六センチ、重量は一足で五一〇グラムである。

E-23 和歌祭舞楽装束

糸鞋 (挿図39、下の列の向って右) 白木綿製で、底は革、藁表の草履のような中敷

が入っている。足の長さは二四・五センチ、甲の幅一〇センチ、甲の幅を測定した位置での甲囲りの外周は二六センチ、重量は一足で二五〇グラムである。

右の和歌祭舞楽装束二十三点は、装束の形態や染・織・繡の技法、そして文様の点などから江戸前期の諸様相が窺われ、またそれらには四天王寺所蔵の慶長期舞楽装束に近似した諸点も^{註35}観察されるのでこれらは、

元和七年(一六二二)から毎年五月十七日に行われ続けて来ている和歌祭の比較的初期に整えられた舞楽装束の一部であると考えられる。挿図40は紀州東照宮蔵「東照社縁起」(住吉広通一慶長四~寛文十年1659-1670筆)第五巻の和歌祭における舞楽図の部分で、これらの装束と関連深いことから参考までに供した。

四 むすび

さて次に、今回の報告論文のうち「二 紀州東照宮蔵服飾類

の伝来概要」の伝来別グループ「B」項で触れた(美術研究三〇六号二八頁上段)茶壺四口(挿図43)の口覆四枚(図版V、挿図41)を紹介しよう。

神社財産登録台帳(本簿)には、Bグループの他の品目同様に、徳川將軍家よりの拝領品で明治四年五月に紀州旧藩主の正二位徳川茂承が東照宮に寄附したものととして、茶壺「華山」^{註36}「楊柳」「小面」「佐藤」が記入され、それぞれに華山には「焼唐物、口径り寸法四寸三分、口覆縷金」、楊柳には「焼朝鮮、口径り寸法三寸八分、口覆縷金」、小面には「焼朝鮮、口径り寸法三寸八寸、口覆縷金」、佐藤には「焼唐物、口径り寸法四寸三分、口覆縷金」と付してある。

挿図43 配置

| | | | |
|-------|---|---|---|
| h | a | b | |
| i | c | d | |
| j (f) | | | |
| j (r) | e | f | g |
| j (v) | | | |
| j (=) | | | |

挿図43

- a 茶壺 華山（花山） 高さ41cm, 口径13.2cm, 底径15.6cm
- b 茶壺 楊柳 高さ40.2cm, 口径13.2cm, 底径15.2cm
- c 茶壺 小面 高さ38.2cm, 口径12.2cm, 底径15cm
- d 茶壺 佐藤 高さ42cm, 口径12.8cm, 底径15.2cm
- e 茶壺 華山（花山）底裏部分
- f 茶壺 小面 底裏部分
- g 茶壺 佐藤 斜め上方よりの部分
- h 茶壺口蓋外側 上段向って左より華山, 楊柳, 下段向って左より小面, 佐藤
- i 茶壺口蓋内側 上段向って左より華山, 楊柳, 下段向って左より小面, 佐藤
- j 茶入日記 各茶壺内箱蓋裏に貼付してある。

茶壺の採寸は西川秀紀宮司のノートによる。

ところで、茶壺四口の写真を東京国立博物館工芸課長で陶磁専門の林屋晴三氏にお目にかけてきたところ、これら四口は何れも十五世紀から十六世紀に中国の河南で製作された所謂ルソン壺^{註37}で、この手のものは現在名古屋の徳川美術館にもあるとのことであった。口覆に使用されている裂地については御存知なかったもので、早速徳川美術館に出向き（昭和五三年二月二四日）、紀州東照宮の茶壺や茶壺口覆のカラーとモノクロの写真をお目にかけて尋ねたところ「口覆はそのような裂ではなく金襴と緞子である」との回答であった。どの手の金襴か、緞子か、陳列時のスナップ写真なりと拝見出来れば見当もつくことだが、それは又の機会を俟つことにして、紀州徳川家伝来の將軍家からの拝領品茶壺四口は、所謂ルソン壺で、同じ手の茶壺が尾張の徳川家にも伝来している。しかしそれらの口覆は紀州徳川家のは四枚ともに金華山（台帳でいう縷金）であるが、尾張徳川家のは金襴と緞子で紀州のとは異質の裂地である。ということが今回の調査で凡そのところ明らかになったのは幸であった。

ここで茶壺及び茶壺の口覆いの説明を簡単に加えておくと、茶壺は葉茶を貯蔵し運搬する壺で、高さが四〇センチ前後、口は比較的小さく胴が張っている。もともとは桃山時代に南方から容器として輸入された^{ルソン}呂宋の壺（実際の製作地は中国の河南）を茶人が取り上げて抹茶の葉茶を貯蔵・運搬するのに用いたことからその流行を見るに至った。茶人が掛物や茶入れと同様に茶壺を名器として持った上に、江戸時代になってからは宇治でとれた新茶を將軍や大名に届けるのにこれらの茶壺が用いられ、これが茶壺道中^{註38}といって年中行事の一つとなったため、一層重んじられるようになった。従って和物でも瀬戸、信楽、丹波、仁清などで茶

挿図45 茶壺袋（小面）底が見える側

挿図44 茶壺の収納時つめもの 茶壺底敷ぶとん、棒状枕

挿図46 茶壺収納箱（外箱と内箱） 向って左より華山、楊柳、小面、佐藤の各組合わせ

壺が出来るようになり何れも珍重された。貯蔵器としては陶質の上から呂宋壺（中国河南製）が最も適しているが、鑑賞用としては瀬戸や仁清、殊に仁清がその美術価値を非常に高く買われている。また茶道ではこの茶壺を飾って口切の茶事というのを行うが、これは五月に新茶の葉茶を入れて封じ込め（木の蓋をして和紙で目貼りして）、秋（十一月開炉とともに）その封を切ってこれをひき、客に供する行事である。なお葉茶は幾つかの小袋に分けてつめ、上茶ほど壺のまん中に入れるものとされる。茶壺の口覆は、口切の茶事で茶壺飾りの折に茶壺の口を覆い飾る裂のこと

で、金・銀欄、緞子等の格調の高い美しい裂で作られた。^{註38}紀州東照宮の茶壺や茶壺口覆の収納箱等にも茶入日記等の記録が見られる（挿図43j）。

紀州徳川家に伝来したこれら四口の茶壺に付属する四枚の口覆は何れも牡丹唐草文様金華山裂^{註39}で、同一の裂から裁断されたものである。台帳に縷金と記入された撚金糸で地の部分が埋めつくされている見事な紋ビロードで、撚金糸の外、白、赤、緑の三色で文様が出されている。口覆は写真で見られるような複雑図形の曲線裁断で、またその中央には何れにも大輪の花が位置するように按排されて裁つてある。裏裂に赤と紫の二種類の平絹が用いてあり、中には金華裂の裏打の和紙が入っている。口緒は紅と紫の二種類の組紐が用いてあったようであるが、現在も当初のが残っているのは赤い口緒の花山だけである（図版V）。仕立も当初のままのうぶなものである。

この口覆の裂は極めて珍しい裂地の金華山裂で、文様も古様が備っており、桃山頃の極上品の渡りものと見做してよいであろう。山辺知行多摩美大教授にカラー写真、モノクロ写真をお目にかけて報告した時に

は、遺品資料として金華山でこのように古いのは先ずないのでと驚かれ、品質、保存の良好さにも驚嘆された。次いで、元川島織物研究所研究員で上代織技研究の権威佐々木信三郎氏にも同様にして報告したところ、これは大変な手数、経錦のような手法を（白、赤、緑の三色で牡丹唐草文様のビロードを織っているから丁度上代裂の経錦のように三重経にすることになる）ビロードの輪奈織りでやりながら金糸を地一面に入れて行っているのだから、大変なことをやったものだと言われ驚嘆されておっしゃった。現在のところこの類品は他にはない。

文様は四枚の口覆いから全容が復元されたので挿図42bに示した。一口に牡丹唐草文とは言っても菊唐草や芙蓉唐草、蓮華唐草等の組み合わせられているものも多く、この場合も牡丹唐草、芍薬唐草、芙蓉唐草（八重の）、蓮華唐草がそれぞれ単独の折枝模様になっており、それら四種の折枝模様が巧みに組み込まれて一単位となり四方に連続展開する構成となっている。図様は花、蕾、葉、茎の自然物の曲線が程よく強調された便化で蔓状の輪郭線が生き生きとしており、大輪の花をつけた四種の折枝は伸び伸びと華やかである。花の折枝は裂の経方向には互の目に配され、緯方向では一段おきに向が逆に置かれている。地を撚金糸で埋め、花と蕾は、白は赤の輪郭線で、赤は白の輪郭線で、そして葉と茎は緑で、葉脈を赤と白の線で繊細にあらわしている。花と蕾の色は緯方向二つつつ赤、白と並んでいるので、それが経方向では互の目に並んでジグザグに点在する配置となっている。この図柄にこの色彩構成はよく合っており、地の部分が金色に輝く多色紋ビロードの質感に更に重厚さと華麗さを加え典雅な格調の高さを表出している。

牡丹唐草文様金華山裂 文様の大きさと地合等

文丈は二九・五センチ前後、窠間幅は三二センチ、花の径は最長が九・八センチ、最短が七・二センチ。

赤、白、緑の絹糸三色を丁度上代裂の経錦を織るように三重経にして複雑な牡丹唐草文様を輪奈ビロードで織り出し、その文様部分はすべて輪奈を切って毛羽立たせている。地には撚糸糸が一センチ間に一〇本弱（二センチ間に一九本）入っている。撚糸糸は細く裁断された金箔が紅染と思われる透明度のある紅色絹糸の芯にZ撚に巻きつけてある。搦糸は赤色の地搦みのようで、一センチ間に九本前後入っている。

口覆裏裂二種

(イ) 赤平絹 節が所々にある糸で、経糸は緯糸より幾分細く、密度は一センチ間

に、経糸は三五本前後、緯糸は三二越前後、後染。華山と小面の裏裂に使用。

(ロ) 紫平絹 羽二重風の平絹で、経糸は緯糸より幾分細く、密度は一センチ間に、経糸は四二本前後、緯糸は二八越前後、後染。楊柳と佐藤の裏裂に使用。

茶壺口覆各個の略解

(1) 華山（口覆の箱の蓋には華山と書かれている。図版V）中央に白い花の芍薬の折枝が配されるように金華山裂が裁断されている。裏裂に赤平絹使用、口覆の箱の蓋に口緒紅と書かれており、当初の口緒と思われる紅絹紐が付いている。大きさは口蓋を覆う部分の径が一五センチ、縦と横の長さは共に三三センチ（挿図42 aのように伸ばして四二・五センチ）、最も凹んだ部分を結んだ対角線上の長さは共に二二・五センチ（挿図42 aのように伸ばして三三センチ）、重量は五八グラム。

(2) 楊柳 中央に赤い花の八重芙蓉の折枝が配されるように金華山裂が裁断されている。裏裂に紫平絹使用、この口覆の箱の蓋には口緒紫とあるが現在は無い。大きさは口蓋を覆う部分の径が一五センチ、縦と横の長さは共に三四センチ（伸ばして四〇・五センチ）、最も凹んだ部分を結んだ対角線上の長さは共に二一・五センチ（伸ばして二九・五センチ）、重量は五三グラム。

(3) 小面 中央に赤い花の蓮華の折枝が配されるように金華山裂が裁断されている。

裏裂は華山と同じ赤平絹、この口覆の箱の蓋には口緒紅とあるが現在は無い。大きさは口蓋を覆う部分の径が一五センチ、縦と横の長さは共に三五・五センチ（伸ばして四三センチ）、最も凹んだ部分を結んだ対角線上の長さは共に二三・五センチ（伸ばして三二・五センチ）、重量は五八グラム。

(4) 佐藤 中央に白い花の芍薬の折枝が配されるように（1）華山と同じ）金華山裂が裁断されている。裏裂は楊柳と同じ紫平絹、この口覆の箱の蓋には口緒紫とあるが現在は無い。大きさは口蓋を覆う部分の径が一五センチ、縦と横の長さは共に三一センチ（伸ばして三九センチ）、最も凹んだ部分を結んだ対角線上の長さは共に二一・五センチ（伸ばして二九・五センチ）、重量は五三グラム。

更に茶壺に付随する染織品があったのを知ったのは、昭和五四年三月下旬、七回目の紀州東照宮染織品調査に趣いた折で、茶壺の撮影にかかろうと茶壺納入の外箱、内箱（挿図46参照）と開けて行った時、茶壺と内箱との間に、詰めものの棒状枕や、茶壺の底に敷いてあった茶壺底敷ぶとん、茶壺袋、風呂敷の類が続々と出てきた。その中には後世の詰めものや袋、風呂敷もあるが、当初からのものと思われるものは紋ビロード、ビロード、緞子等何れも桃山期の優れた染織品で、茶色ビロードに見られる鉄媒染のための朽損以外は保存状態もよく、仕立も当初のままの生なものであるため、それらを次に簡単に紹介しておこう。

(1) 茶壺底敷ぶとん（図版VI a、挿図44）

一辺が二六センチ前後の四角で、木綿わたが^{註41}入っている。重さは七〇グラム、九〇グラムが二枚、九五グラム、一〇五グラムとなっており、茶壺四口に対し底敷ぶとんは計五枚あり、今回茶壺を出した時には楊柳の底に濃茶ビロードと赤紋ビロードの二枚が敷いてあった。五枚のうち濃茶ビロードが二枚、赤ビロードが

一枚、赤紋ビロードが二枚である。

ビロードは三種とも上質で、特に赤の紋ビロード(図版VI a、挿図44)は流麗な花唐草文様の上質紋ビロードで、保存状態もよい。文丈二一・五センチ、窠間幅一四センチ、花唐草文の花の長径は六・五センチ、短径は五・七センチ、地は縞子地(変り六枚縞子^{註42})で、文様が輪奈ビロード、密度は一センチ間に、経糸は七〇本前後、緯糸は四三越前後である。

(2) つめもの用棒状枕(挿図44)

ビロード製で木綿わたが中に入っている分が当初のものであろう。ビロードは(1)茶壺底敷ぶと同様、濃茶ビロード、赤ビロード、赤紋ビロードの三種で、何れも底敷ぶと同裂のビロード三種である。木綿わたを棒状にし和紙でくるんで形を整え、その上からビロードを被せた仕立のようである。大きさは、直径が七・五センチから八・五センチ、長さが三七センチから四五センチまで種々、重さは二一〇グラムから三〇〇グラム弱まで種々である。

(3) 茶壺袋の類

茶壺等陶磁器を深さのある箱に入れ入れする際、茶壺等がすっぽり入る袋に入れ、更にそれらを包み込むのに充分な大きさの風呂敷を用いて吊り上げたり吊り下したりする方法を採ると出し入れの操作が容易になり、更にその袋や風呂敷が箱との間のクッションになって損傷の危惧が減少する。そういう意味からである。今それら紀州東照宮の茶壺四口にもそれぞれに袋と風呂敷が用いてあった。今それをここで列記すると、華山は表裏共裂の地質が薄くて柔らかな水浅葱平絹綿入袋(真綿入り)に入れたものを更に黄木綿風呂敷に包んで内箱に納め、楊柳は表裏共裂の水浅葱羽二重袷袋に入れて更に同裂の真綿入風呂敷で包んで内箱に、小面は薄浅葱花唐草文緞子袷袋に入れ、更に水浅葱羽二重真綿入風呂敷に包んで内箱に、佐藤は水浅葱羽二重袷袋に入れ、更に白羽二重真綿入風呂敷に包んで内箱に納めてあった。

これらのうち、小面の茶壺袋(図版VI b、挿図45)は、先に述べた茶壺底敷ぶと

んや詰めもの用棒状枕に使用されている紋ビロードやビロード同様、桃山期の上質外来裂と目されるのでその概略を記しておく。表裂は薄浅葱牡丹唐草文緞子で、裏裂は紫(経糸が青、緯糸が紅の平織)琥珀の袷仕立、口紐通しの紐はS撚の紫細紐で、口紐は丸打(四つ打)の薄茶紐、大きさは底裂の径が一四センチ、底裂の縫目から口までの長さが五〇センチ、胴の最も張った位置の周囲寸法が一〇センチ(両脇に縫目ありその間の幅が五五センチ)。

表裂は牡丹唐草文様の薄浅葱色の緞子で、文丈は二四・五センチ、窠間幅は一七・五センチ、大きい方の花の長径は一〇センチで、短径は八センチ、小さい方の花の長径は八・五センチで、短径は七・三センチ、地は経の五枚縞子、文はその裏組織で緯の五枚縞子、経糸、緯糸共に薄浅葱で、密度は一センチ間に、経糸は七〇本前後、緯糸は二八越前後である。

裏裂は経糸青、緯糸紅の玉虫になった紫色の琥珀で、経糸は細く、緯糸は径糸より幾分太く平織、密度は一センチ間に、経糸は七六本前後、緯糸は五二越前後である。

以上の調査によって、紀州東照宮に蔵される服飾類、染織品には次の諸事項が結論として述べられる。

まず、これらA、B、C、D、Eに伝来別分類した諸服飾類、染織品の総計概数九十余点^{註43}は、調査の結果何れもが染織史、服飾史の見地から、それぞれの伝承内容に合致する年代の遺品と考察される。即ちAグループの束帯の装束、及び小袖三領と小袴一腰は、それらの形態、縫製、染織技術、文様、裂地の立場から見て何れも江戸初頭以前のものであることが明らかであり、社伝通り家康所用品と見做すことが出来る。

Bグループの能装束三点と白綾小袖及び茶壺口覆等茶壺に付随する染織品の数々もAグループの場合と同様の見地から江戸初頭以前のものと見

做され、Cグループの革陣羽織も同様江戸初頭以前のものでして社伝通り家康所用品と見做される。Dグループの戦陣用衣類は至極珍しい衣料の数々であるが、何れにも形態、縫製、裂地に南蛮服飾の影響や桃山期から江戸初頭にかけての外來裂の様相、更に当時のわが国染織技術の特性が横溢しており、桃山から江戸初頭の戦陣用衣類は確実で、社伝通り徳川頼宣大坂陣所用品は信憑性がある。Eグループの舞樂装束は、その形態、染織、繡、文様等から比較的古様が観察され江戸前期のものとして推測される。Eにとりあげた二十三点は元和七年の紀州東照宮建立当時、和歌祭礼用舞樂装束として多数作られたであろう中の残存遺品ではなからうかとも考えられる。

次に、これらの遺品は上質揃いで、中でも五種類ばかり(茶壺口覆四枚に使われている金華山裂、家康所用能装束法被の蜀江錦、その裏裂の紋紗、家康所用小袴の繻縞子、頼宣所用陣羽織の金入繻珍―二六頁下段参照)は極上質の外來裂が用いてあり、また総じて保存状態が良好である。そしてEグループの舞樂装束を除き殆どが当初の仕立のまま生な形で伝えられている。

更にそれらの中には頼宣所用の襷襟三点(D-4、5、6)のように驚異的に珍しい遺品や、同じく頼宣所用戦陣用下着類(Dグループの鎧下着袴下等)のように、従来はその使用目的の消耗度から残存遺品は僅少乃至は皆無であった品目が種々見出されるなど服飾史上特筆すべき事項があり、その他桃山期のものでは従来の遺品資料には見られなかった形態、材質の服飾類が多数出現し(A-12の家康所用革靴、C-1の家康所用革陣羽織、A-16の家康所用繻縞子小袴等)、それらには所謂南蛮服飾の影響が濃く或は多少とも認められる場合が殆どで、この桃山期の特色顕著な衣

料群新発見は服飾史上意義甚大であった。^{註44} また家康所用束帯装束(A-1~12)は、これまでの束帯遺品資料ではこの時代まで逆るものは皆無だったので服飾史上からも貴重である。

紀州東照宮蔵のこれら服飾、染織品は勿論染織史上でも意義深い資料の数々であって、当時の外來裂の逸品としては茶壺口覆の金華山裂(図版V、挿図41、42)、家康所用能装束法被の蜀江錦(B-1、美術研究三〇六号図版I)、その裏裂の紅染牡丹唐草紋紗(挿図47)、家康所用小袴の紅黃繻縞子(A-16、美術研究三〇六号図版IIIb)、頼宣所用陣羽織の紅地桃文様金入繻珍(D-1、美術研究三一〇号図版I)等が挙げられよう。このうち茶壺口覆の金華山裂は、遺品資料としてもこの裂のように桃山期まで遡る古いものはこれまで皆無であった。また紗綾の多数発見によって従来は遺品資料僅少のために裂幅不詳であったものが判明し、且つ地紋に紗綾形文様のない紗綾の例にも当たることが出来た。更に葵紋が織り出されていることからわが国で製織されたことが見当づけられる家康所用能装束狩衣の金欄は、現在のところ、国産金欄の最古のものといえ、裂類に関する発見が数多あった。染に関する逸品として挙げた金

挿図47 紅染牡丹唐草紋紗
(B-1の伝家康所用蜀江錦法被の裏裂)

華山裂、蜀江錦、紋紗、縞縹子、金入縹珍に用いられている赤色が極めて純度の高い紅で染めてあったことも判明し、また家康所用の小紋小袖(A-13)と頼宣所用の鎧下着類に見られる小紋染等型染(D-7、12)の類は、桃山から江戸初頭にかけての従来の資料僅少を補う得難い数々であり、それら資料から当時の多岐に亘る型染染色技術、文様等の様相を知ることが出来た。頼宣所用の繫ぎ鎧下着(D-10)の上体衣の絞り染と紫紗綾帯(D-16)の絞り染からは、縫締の針目の観察や縫締糸の抜き残し分を確認出来たりしたこと、から辻ヶ花染末期の縫締絞りの観察が出来、家康所用の鉄線唐草絞り小袖(A-14)には江戸前期の匹用絞りと縹が主流となった小袖文様表出技術の前兆を見、摺箔裂袋八枚(D-18)からは、文様の多様さとその組み合わせ、摺箔技術のほか袋のために新に摺箔裂を作ったか、能装束の繰り廻しかなど今後の考察が種々あり、家康所用の革陣羽織(C-1)には金唐革の祖型を見、その総は材質と製作方法に見極め得ない点が残る等、予期せぬ知見の続出であった。

このような服飾史上、染織史上稀に見る資料的・美術的価値の高い資料の一群であり、それらは質量ともに、昭和三十年六月、当時の東京国立博物館染織室長山辺知行氏によって発見された上杉神社蔵の上杉家伝来服飾類^{註45}以来の、またそれに次ぐ服飾染織史上有意義な大発見であったといえる。これら紀州東照宮蔵の服飾類、染織品によって上杉神社蔵の服飾類より約一世紀後の服飾、染織界の様相を察知出来る手がかりを得た。今後の精査に俟って正確にして克明な調査研究を続行し、意義ある成果を齎したいと考える次第である。

(一九七九年五月)

註

33 唐織は通常三枚綾組織の地に色糸の絵緯を織り込んで恰も刺繡で文様を表現したように糸を柔らかく浮かせた重厚華麗な絹織物をいうが、舞楽装束の縁裂等に使われる唐織は薄手の方が装束になじむためであろう、地組織が平織で全体が薄手になっている。

34 毎日新聞社で出版された重要文化財工芸Ⅱの473大阪四天王寺の舞楽装束の小さな写真で見るところであるが。

35 註34同様の写真で見るところであるが、四天王寺の舞楽装束の方が細身で袖丈が短く、刺繡部分が長かったり形態の上で古様があるが、文様や刺繡技法には紀州東照宮のものにも四天王寺の舞楽装束が持つ文様の生氣や共通する様式があり、染色や刺繡にも共通した技法の素朴さと表現のびやすさがある点など。

36 台帳には花山と書かれ茶入日記にも花山とあるが、その茶壺の底裏には華山(挿図43e)とあり、口覆の箱の蓋にも華山とあり、何れでもよいのであろう。

37 呂宋壺といわれているのは、何れも一五・六世紀に中国の河南で作られた丈が四〇センチ前後で口が比較的小さく腰の張った壺のことで、桃山時代、南方との交易船が輸入してきた。それを当時の茶人が採りあげて抹茶の葉茶を貯蔵運搬するのに用いた。

38 以上、茶壺及び口覆の説明は、平凡社の世界大百科第十四巻八一三頁の「茶壺」の項(小田栄一氏執筆)と、林屋晴三東京国立博物館工芸課長談話に基いた。

39 金華山という裂は、現在の西陣で通常紋ビロッドのことをいう。紋様部分を毛切又は輪奈として地を縹子織としたもの。紀州東照宮の茶壺底敷ぶとんやつめもの用棒状枕の紋ビロッド(図版VI a、挿図44)は現在西陣でいうところの金華山に該当する。

また金華山織について染織辞典(日本織物新聞社編 昭和六年二月)では「紋様となるべき部分の毛経糸は紋織機にて之を引上げ、鋼針又は薄き銅板を織込みて輪奈を作り、地合の部分には燃金糸を二行連続して織込み、順次之を繰返えし、銅針の部分は必要に応じて毛切を施す云々」とあり、燃金糸が地に織込んであることを記してある。文献では古いものとしては前田育徳会蔵の江戸前期頃の裂帖に金華山の書き込みを見たところ、東京国立博物館染織室長今永清士氏が言われているのが、今のところ最古であると思われる。

40 真綿を棒状にしただけのもの(挿図44の中段向って左端の二本など)や比較物新しい時代の羽二重の袋、黄木綿の風呂敷なども現在使われている。

41 当時木綿は貴重品で、中国や朝鮮からの舶載品が主で、国産では朝鮮から持ち帰った種子で栽培した三河の木綿が多少出来る程度であった。木綿わたも綿織物も上流者のもので、一般人が用いられるようになるのは木綿が各地で栽培されるようになった江戸中期以降である。

42 六枚縹子は縹子の組織では出来ず、六枚縹子風なものの変り六枚縹子である。この紋ビロッドの地組織も変り六枚縹子になっていた。

43 紀州東照宮蔵の服飾類、染織品は、大小種々の端裂、損じて二つ三つに切り離れたもの(茶壺のつめもの用棒状枕には、ちぎれて一本が二つ三つに分離しながらも今もなおつめ

もの使用されているのが数本ある)、紐類、片身、引き解きかけのものといった員数として正確には数え難いものも多々あり、総数はあくまでも概数ということにした。

44 西洋服飾史が専門の丹野郁琦^{たのひかり}玉大学教授には、筆者が紀州東照宮の服飾類第一回調査から帰って写真が出来る早々に連絡をし、その服飾類中に見られる南蛮の影響の多大なることを知らせた。昭和五十一年三月下旬、筆者が第四回目の調査に紀州東照宮に趣いていた折に、丹野教授は石井とめ子、景平一恵両氏を助手役に同伴して来訪され、西川秀紀宮司の御厚意によって西洋服飾史の立脚点から二日間の見学、調査をされた。教授年来の研究に早速紀州東照宮の南蛮影響服飾類が悉く加えられ、同年十一月、教授の学位論文でもあった「南蛮服飾の研究」(雄山閣出版)が出版された。また同教授は昨春秋(昭和五十三年秋)リスボンの国立衣裳博物館で開催されたイコム・コステューム国際会議で「南蛮服飾」ポルトガル人が日本の服飾文化に与えた影響」と題し研究発表された折、紀州東照宮の頼宣所用襷襟を二点(D-5、D-6)を持参され、世界でも稀有のものとする多くの研究者の注目をひいた。

45 上杉家伝来服飾類参考文献

上杉神社の服飾品

ミュージアム56号 昭和30年11月

山辺知行

伝上杉謙信所用金銀襷綴子等縫合胴服について 上、下

神谷栄子

—— 伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告 一 ——

美術研究216・219号 昭和36年5月・11月

伝上杉謙信所用小袖十二領

神谷栄子

—— 伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告 二 ——

美術研究228号 昭和38年5月

伝上杉謙信所用帷子四領

神谷栄子

—— 伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告 三 ——

美術研究233号 昭和39年3月

伝上杉謙信所用胴服八領 上、中、下

神谷栄子

—— 伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告 四 ——

美術研究242・243・244号 昭和40年9月・11月、昭和41年1月

伝上杉謙信所用陣羽織八領

神谷栄子

—— 伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告 五 ——

美術研究259号 昭和44年3月

上杉家伝来鏡下着・着込み・頭巾等四領二個 上、下

神谷栄子

—— 伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告 六 ——

美術研究291・294号 昭和49年1月・7月

上杉家伝来衣裳

山辺知行、神谷栄子

講談社

昭和44年4月

美術研究所報

「日本美術年鑑」の刊行

美術部第二研究室の編集による「日本美術年鑑」昭和五十一年版(昭和五十年一月から十二月の間の記事)は昭和五十三年三月に、また同昭和五十二年版(昭和五十一年一月から十二月の間の記事)は昭和五十四年三月にそれぞれ刊行された。

研究会 昭和五十四年

一月二十四日 中国文物瞥見(二)

上野アキ

三月 十四日 八大人と牛石慧について

—— 新出の牛石慧・鳥石図について ——

鶴田武良

五月 九日 洋風画法による達磨図について

三輪英夫

五月 三十日 色料と吸収スペクトル

東大理学部教授 森田茂広

六月 三十日 雲崗石仏と二天像ほか

猪川和子

七月 十一日 古代朝鮮仏と飛鳥仏

久野 健

九月二十六日 ターク・イ・プスターンの摩崖浮彫

関口正之